

中絶をめぐる言説空間とゆらぎ —アーシュラ・K・ル＝グウィンの“Standing Ground”を中心に—

宮本 文

1. はじめに

2017年トランプ政権になって以来、アメリカの分断が深まったと言われている。¹ その分断を象徴する大きな論点の一つが中絶問題である。1973年最高裁のロウ対ウェイド判決において中絶が合法化されて以来、² いわゆる生命を尊重し中絶反対の立場を取るプロ・ライフ (pro-life) と中絶する権利を擁護する立場を取るプロ・チョイス (pro-choice) の対立は激化し、中絶をめぐる是非は現在に至るまでアメリカの分断を象徴する論点となっている。³ プロライフの中には中絶クリニック前でピケを張り、中絶手術を受けにくる人々を説得しようと試みるだけに留まらないアーミー・オブ・ゴッドやオペレーション・レスキューといった過激なグループもあり、大勢の胎児の命を救うという大義名分の下に中絶手術を行うクリニックを爆破・放火したり、中絶を行う医師や関係者に対して脅迫・殺害する事件も頻発している。⁴

また、ロナルド・レーガン (Ronald Reagan, 任期 1981-1989) から、ジョージ・W・ブッシュ (George W. Bush, 任期 2001-2009)、ドナルド・トランプ (Donald Trump, 任期 2017-) ら歴代の共和党の大統領は、最高裁判事の任命を通してロウ対ウェイド判決を覆そう試みてきた。2020年9月13日、大統領選直前にリベラル派の最左翼であるルース・バイダー・ギンズバーグ最高裁判事 (Ruth Bader Ginsburg, 1933-2020、任期 1993-2020) が死去したことで、トランプ大統領は「7人の子どもがいる敬けんなカトリックで、人工妊娠中絶や銃規制に批判的な立場の保守派」(「トランプ大統領」)のエイミー・バレット判事 (Amy Barrett, 1972-) を後継者に指名した。同年10月26日に上院議会がこれを承認したので、最高裁判事9人のうち6人が保守派で占められることになり、ロウ対ウェイド判決が覆される可能性がいよいよ現実味を帯びてきている。

分断を深めるトランプ政権下で、プロチョイスの動きとしてとりわけ目を引いたのは、ギンズバーグ判事のアイコン化である。アメリカで二番目の女性最高裁判事となった彼女は、リベラル派の弁護士・裁判官として、1960年代から裁判を通して性差別と戦ってきた。例えば、弁護士時代には男女で同一の仕事をしていても賃金に著しい格差があることを訴え、緻密な法廷戦略により最高裁で違憲判決を勝ち取るなど、最高裁まで持ち込んだ裁判6件中5件勝訴を勝ち取った。(『RBG』) 1993年に民主党のビル・クリントン大統領 (Bill Clinton, 任期 1993-2001)

によって最高裁判事に指名され、リベラル派の最左翼として（すなわち、プロチョイスの急先鋒として）最高裁判事を 2020 年 9 月に亡くなるまで務めてきた。ドキュメンタリー映画 *RBG*（2018, 『RBG』）では、そのギンズバーグ判事がとりわけトランプ政権になってからリベラル派の間で彼女のアイコン化が急速かつ意識的に進められた舞台裏が、彼女の功績と合わせて描かれている。その中で繰り返し証言されるのは、ギンズバーグ判事が非常にシャイであり、人の話をじっくり聞く控えめな性格だということである。一方で、そのようなルース・ベイダー・ギンズバーグが、一夜にしてリベラル派のアイコン“RBG”として祭り上げられた過程が描かれる。RBG はrapper の Notorious B.I.G. をもじりて、Notorious RBG としてキャラクター化され、そのイラストが描かれたマグカップなどあらゆる商品が作られた。また、TV のコメディ・ショー『サタデー・ナイト・ライブ』ではパロディの対象となった（彼女自身、自分と RBG との乖離を楽しんでいる様子も映し出される）。

ギンズバーグ判事が残した偉大な功績とは別に、ここで着目したいのはトランプ大統領のメディア戦略に対峙する形でギンズバーグ判事のアイコン化がリベラル派の間で進められたことである。言うまでもなく、TV のリアリティショー *The Apprentice* のホストを 2004 年から 2015 年まで務めたトランプ大統領はポップカルチャーの申し子である。プロライフの期待を担うトランプ大統領とプロチョイスの頼みの綱であるギンズバーグ判事の対立は、ポップカルチャーのアイコンでの対立として反復されたのである。アイコンは単純化・凝縮された物語の際たるものであり、それぞれの陣営にとって、本来的には一枚岩ではない保守とリベラルの物語——プロライフ、プロチョイスの物語——を、その単純化・凝縮された物語に動員・回収する大きな武器となっている。⁵ その結果、アメリカはかつてないほど分断を深めているのである。

一方で、中絶をめぐる泥沼の様相の中、分断を越えて互いを知ることを模索する動きが文学界から出てきたことは注目に値するだろう。⁶ ジョイス・キャロル・オーツ（Joyce Carol Oates, 1938-）の *A Book of American Martyrs*（2017, 『アメリカの殉教者たちの書』）とジョディ・ピコー（Jodi Picoult, 1966-）の *A Spark of Light*（2018, 『閃光』）⁷ は、それぞれプロライフ過激派による中絶クリニックへの銃撃殺人事件を発端に、プロライフとプロチョイスのそれぞれの立場を並置しながら中絶をめぐる人々の物語を描き出している。ピコーはインタビューの中で、自身はプロチョイスだと述べながらも、『閃光』について “It’s one of the most balanced looks at abortion rights and women’s reproductive rights. I found I worked hard to make it balanced and I would allow him to see other people’s points of view with compassion and empathy, and perhaps protect *Row vs. Wade* a little longer”（“In Depth” 00:00:49-01:06）と述べている。また、オーツの小説では、銃撃されて命を落とした中絶クリニックの医師とその家族、および銃撃した狂信的なプロライフである銃撃犯とその家族を、医師と銃撃犯、そして事件を背負うことに

なるそれぞれの娘たちを鏡合わせにしながら、700 ページ以上に渡って視点を切り替えながらさまざまな登場人物たちの過去現在が描かれている。物語の終盤では、医師であった父のドキュメンタリーを撮るために過去を辿ってきたネィオミ・ボーヒーズ (Naomi Voorhees) が、ボクサーになった銃撃犯の娘ドーン・ダンフィー (Dawn Dunphy) に身分を隠して取材するエピソードが中心になる。とうとうネィオミが身分を明かすメモを残して席を立ったところへドーンが追いかけて来る。そして二人が無言で抱き合うところで小説は終わる。この二作品は小説という語り特性を活かして、トランプ支持者とアンチ・トランプの人々、保守とリベラル、プロライフとプロチョイスが互いの物語の中に引きこもり断絶を深める言説空間に風穴を開けようとする試みだといえよう。⁸

本稿では、その先駆けとなるようなアーシュラ・K・ル＝グウィン (Ursula K. Le Guin, 1929-2018) の 1992 年の短編 “Standing Ground” (「立場を守る」) を中心に、中絶をめぐる言葉の戦いを検討する。ル＝グウィンは *Earthsea* (1968-2001, 『ゲド戦記』) シリーズや *The Left Hand of Darkness* (1969, 『闇の左手』)、その他数多くのファンタジー小説や SF 小説で有名である一方、エッセイも多数執筆してきた。「立場を守る」はル＝グウィンには珍しいリアリズム小説であり、中絶クリニックを舞台に、そこへ訪れた母娘と外でピケを張る中絶反対派の男女を中心にアメリカの日常的な風景を描いている。ル＝グウィンはエッセイにおいて、中絶が非合法であった 1950 年代、大学時代に望まぬ妊娠から中絶手術を受け、そのおかげでキャリアを諦めずに済み、その後三人の子供を産み育てることができたことを書いており、ストレートにプロチョイスの立場を表明している。⁹ それに対して、フィクションの「立場を守る」はプロチョイスの主張を代弁するのではなく、むしろプロチョイスとプロライフの言説がゆらぐ瞬間を丁寧に積み重ねていく。本稿では、プロライフとプロチョイスというそれぞれの言葉が一枚岩の言説として物語化され、結果的にプロライフとプロチョイスの物語が隙間なく充満した言説空間が作り上げられていることに着目しつつ、「立場を守る」がそのような物語が充満しせめぎあう言説空間をどのように描き、またどのようにその言説空間の隘路を縫って物語から解き放たれる空間を束の間出現させているのか見ていく。

2. 中絶をめぐる法廷闘争とアメリカ社会の分断

中絶をめぐる論争が国の分断を象徴する論点となっている大きな理由は、先に触れたように大統領に最高裁判事の任命権があることに関係している。大統領選のたびに候補がプロチョイスなのかプロライフなのか大いに注目されるのはそのためである。必ずしも判決の上で保守派がプロライフの判断を下すというわけではないが、プロライフを標榜する大統領は保守派の最

高裁判事を任命することになり、9名いる最高裁判事の保守派とリベラル派のバランス次第では、ロウ対ウェイド判決が覆される可能性が大いにありうるのは先に述べたとおりである。したがって、プロライフとプロチョイスの言説の形成およびせめぎ合いについて、最高裁という場が大きなカギとなっている。

荻野は、このような中絶をめぐる論争について「アメリカ社会に亀裂を生じさせたこうした対立が出てくる要因」を「最高裁判決自体の持つ特徴ないし性格の中にすでに存在していたもの」(77)と指摘する。それらをさらに三つに分けて説明し、一つ目は「この判決によって中絶の定義が、それまでの『犯罪』から女性の『権利』へと一挙に転換したこと」(77)、二つ目は、第一に挙げた中絶の意味の180度転換が「合衆国憲法の名のもとに連邦最高裁によって行われたこと」(78)としている。そこで連邦議会もまた「最高裁判決の法的根拠である憲法そのものを変える、あるいはそこに『生命』や『人』についての明確な規定を加えることによって中絶は『殺人』であると明記しようという、憲法修正の動きが生まれることになった」(78)とする。そして最も注目したいのが、三点目である。

第三には、中絶を憲法上の「権利」の問題としてとらえる議論の枠組みが作られたことである。このことはその後の中絶をめぐる論争のあり方を大きく規定、もしくは拘束することになった。キム・スケッペルがいうように、法的な権利論というのは、ある権利の存在を認めるか認めないかという二者択一の議論になりやすく、そのため「漸進的あるいは妥協的な解決」という道が閉ざされてしまうことが多い。さらに二つの相反する権利が衝突しあう場合には、裁判所はそれらの権利の間に優劣または軽重という序列をつけることを求められ、その結果、「一方の権利は完全に擁護され、もう一方は完全に打ち負かされる」ことになりやすい。実際、この後論争は、中絶反対派は胎児の「生命の権利」という強力な対抗倫理を前面に押し立てることによって女性の「プライバシーの権利」や「選択の権利」を凌駕し、打倒しようとし、一方中絶擁護派は「胎児の権利」の存在を否定することによって「女性の権利」を守ろうとする、権利同士の全面対決のかたちで展開されることになる。そしてその中では、はたして胎児が権利主体となりうる「人」なのかどうかという問題が、権利論の要として重要な争点となっていくのである。(78-79)

荻野の主張を「物語」という言葉を使って換言すれば、中絶問題を最高裁での法的な権利の問題ととらえることが議論の枠組みとなったことにより、少しずつ互いの妥協点をさぐりながら議論するということができなくなり、その結果、一方が拠って立つ物語が、他方の拠って立つ物語を全否定する状況になっていると言えるだろう。

さらに敷衍すれば、ゼロサムゲームの様相を呈するプロライフ、プロチョイスの物語はそれぞれが先鋭化していかざるをえない。そうすると、必然的にそれぞれの主張の下で、本来的にはあってしかるべき（そして実際はあるはずの）ゆらぎや葛藤が削ぎ落とされ、より単純化した物語になっていく。というのも、より効率的にそれぞれの陣営が人々を味方として取り込むためには、効率の良い単一の物語がもっとも有効であるからだ。そして、一方の物語が少しでもゆらぎを見せれば、他方の物語がそのゆらいだ言説空間に攻め込んでくる。そのような状況をキスリングとシャノン（Kissling and Shannon）は次のように説明する。

It has been difficult for some pro-choice leaders, particularly women, to acknowledge and address the moral and ethical questions raised by abortion. …Moreover, in the highly charged, deeply polarized, all-or-nothing climate of abortion politics, an admission that the value of foetal life is an important element of personal decision-making is rapidly misinterpreted by abortion opponents as an acknowledgement that foetuses are persons entitled to near-absolute protection. (152)

中絶をめぐる論争において、ゆらぎや空白やペンディングという余地も許されない。すなわち、個々の経験や葛藤、ゆらぎを含む内面は、それぞれの物語に複眼的な視点を与えて重層的かつ前向きな議論を可能にする方向に向かうのではなく、プロライフ、プロチョイスのいずれかの物語に収斂されてしまうメカニズムがここには示されているのである。そして、そこでは多様な声が二つのいずれかの物語に回収され、プロライフ、プロチョイスの物語がすみずみまで充滿した政治的な言説空間が形成されることになり、ますますアメリカの分断が深まっていくのである。

また、このような言説空間を強化し分断を深める昨今のメディアの傾向について、西山は以下のようにまとめている。

メディアの多元化に伴って、視聴者も徐々に、自らの政治的選好に近い見解を示すメディアを好んで視聴するようになっていった。その結果、国民が特定の見解のみに触れて他の見解を受け入れない状況が生まれ、それがアメリカ社会の分断につながっていった。…近年では、アメリカ国民の間でメディアに対する不信が強まっているが、その背景には、このような状況がある。とりわけ、視聴者が自らの立場に近いメディアのみ触れる、選択的接触と呼ばれる現象が一般化する中では、時に公正で中立的な報道ですら、バイアスがかかっているように思われてしまうのである。（「第8章3」）

このメディアの傾向は、トランプ支持者とアンチ・トランプの人々、保守とリベラル、プロライフとプロチョイスが、互いの物語の中に引きこもり、断絶を深める言説空間をますます強める方向に働くのである。

一方、「立場を守る」では、個々の経験、葛藤やゆらぎを含む個人の内面と、プロライフ、プロチョイスといった単純化された故に強力な物語との関係を戦略的に逆転させている。具体的に「立場を守る」を分析するにあたり、まずは物語を概観してみたい。

3. 「立場を守る」の概観

それでは小説の書き出しから見てみたい。

They were coming: two of them. The trembling began in Mary's fingertips and ran up her arms into her heart. She must stand her ground. Mr. Young had said stand your ground. He might come. If he came, they would never get past him. She wished Norman would not shake his sign like that. The shaking made the trembling worse. The sign was something Norman had made himself, not one Mr. Young had approved, even. Norman had no right to do everything himself that way. This is a war, Mr. Young said, and we are the army of the Right. We are soldiers. They were coming closer, and the trembling ran down into her legs, but she stood firm, she stood her ground. (67)

タイトルの“standing ground”という表現は、“stand one's ground”という表現から来ており、OEDでは“to maintain one's position against attack or opposition”と定義されていることからわかるとおり、“opposition (敵対)”を前提としている。しかしながら、書き出しでは、誰がどのような立場をとるのか、その前提となる敵対がどのようなものなのか説明することなしに、登場人物たちを物語に放り込み、メアリー(Mary)の内的な独白に読者を強引に引き込むのだ。

「立場を守る」という勇ましい、梃子でも動かないような身振りは、実際のメアリーを叙述するものではなく、彼女の独白の中では努力目標(“She must stand her ground. Mr. Young had said stand your ground”)として提示されている。また、第一パラグラフの終わりに“she stood firm, she stood her ground”と叙述されているにもかかわらず、“shaking”や“trembling”というメアリーの不随意運動的なゆらぎと合わさることによって、彼女の立場が常にこの小説内ではゆらいでいることが暗示されている。加えて、“shake”という言葉に注目すれば、ノーマン(Norman)は能動的かつ暴力的に何かを震わせる一方で、メアリーは受動的に震えており、両

者はともに同じ立場に属しながらも、同時に、両者が対極にあることが読み取れるのである。

このあと、メアリーとノーマンの間を縫って、母と十代の娘がやって来る。どうやら彼女たちが向かっているのは中絶クリニックで、メアリーとノーマンは中絶にやって来た人々を阻止する中絶反対派の活動家であり、母娘は中絶クリニックに受診しに来たことが間接的な描写によって次第に明らかになってくる。ノーマンは胎児が描かれたプラカードを母娘にぶつけような勢いで振りかざす。メアリーはそんな乱暴なノーマンにうんざりしながら、母娘に神の言葉を叫んで建物へ入って行くのを阻止しようとするが、二人はクリニックの中へ入って行ってしまふ。

そこからは、中絶反対の立場をとる人々と中絶を容認する立場をとる人々（ここでは便宜的に母娘も含めてクリニックの内にいる人々をそう呼ぶ）が直接的に接することはない。続く母娘とクリニックの受付の女性とのやりとりや、看護師の女性とのやりとりを通して読者は混乱することになる。というのも、シャリー (Sharee) とデラウェア (Delaware) はファーストネームのみ提示され、どちらが母でどちらが娘なのか特定されずに話が進むからである。そして、受付の女性や看護師たちがそう考えたように、読者も「母親に付き添われた、望まぬ妊娠をした娘」と最初は思うはずである。しかし、どうやら「娘に付き添われた、望まぬ妊娠をした母親」ということが次第に明らかになる。シャリーは自分が中絶クリニックに来ることになった顛末を、独白の中で「レイプ」という言葉や直接的な描写は使わずに、例えば、“What Mac did, in the car, at the drive-in, like that, like some zoo monkey, and then made her watch the rest of the movie” (72) や、“Mac had bent her arm and covered her mouth and struck his thing into her just like some zoo monkey” (72) といった論理的・説明的とはいえない独特の言い回しで表現し、デートレイプにより望まぬ妊娠をしたことを読者に示唆するのである。

そして、中絶クリニックの医師との会話を通して、シャリーが生まれて来る時に脳に損傷を負い、障害を持って生まれてきたことが明かされる。ドクターのローク先生 (Dr. Rourke) は中絶手術の際に、再び妊娠することを避けるために卵管を結ぶ処置をすることを娘のデラウェアに勧めるが (ローク先生はその手術の意味をシャリーが理解できないと思っている)、娘は将来の妊娠の可能性については自分ではなく、あくまでも母シャリーが決めることだと答える。その後で、シャリーはデラウェアと別れて手術室に入っていく。中絶手術が終わったシャリーが薬で朦朧となりながら、デラウェアに “Hi, baby!” というところで小説は終わる。

語りの手法としては、メアリーやノーマン、シャリーとデラウェアの内面に視点が入り込み、プロライフ、プロチョイス、胎児や中絶といった言葉を使わずに、断片ながらそれぞれの言葉づかいで自身の物語を紡いでいく。それぞれの語りにおいて、プロライフ、プロチョイスの言説からこぼれ落ちるものがあればあるほど、個々の切実さが断片として浮かび上がるように

なっている。

4. 中絶をめぐる言葉の戦略-胎児をめぐるレトリック

この短編の訳者である畔柳は、翻訳解説で「中絶をめぐる戦いは、言葉をめぐる戦いでもある」(52)と述べている。「言葉をめぐる戦い」は、中絶論争一般においても重要な要素となっており、両陣営がどのようなレトリックを使うかに大きく依拠している。しかしながら、「立場を守る」の「言葉をめぐる戦い」は、両陣営のレトリックにきれいに収斂されていくわけではない。

先の荻野の引用の中で「その中では、はたして胎児が権利主体となりうる『人』なのかどうかという問題が、権利論の要として重要な争点となっていく」(79)とあったが、とりわけ胎児(fetus)を人間(person)と見なすか否かということは、中絶をめぐるあらゆる論争や言説で中心的な論点を占める。胎児についてどのようなレトリックを使うかということは、プロライフ、プロチョイスそれぞれの主張(とりわけプロライフ)が拠って立つ言説において中心を占めるだけでなく、妊娠・中絶をパーソナルなレベルで経験する女性の中でも、その経験をどのように捉えるかが重要な論点になっている。畔柳は、この作品の胎児をめぐる言葉づかいについて次のように指摘する。

「立場を守る」はこの二語を用いることなく、登場人物の内面からその立場と思想を示す。たとえば胎児の捉え方を見ると、中絶手術を思い描くときノーマンは胎児を“he”と呼ぶ。彼の場合、男性形の代名詞を使うことは一種の癖と思われるとはいえ、この胎児も一人の男として見ていることになる。メアリーは性別にはこだわらないが、“the baby”という。当事者シャリーは「何かが起きている」「傷」「かさぶた」と表現する。…クリニック関係者は母娘に対して「ベイビー」という言葉は一度も発しない。(52-53)¹⁰

この小説の胎児についての「言葉をめぐる戦い」を検討する前に、中絶論争一般についてどのようなレトリックが展開されているのか確認してみたい。プロライフの中心的な戦略レトリックは胎児を人とみなすことによって中絶を殺人とするところにある。そのもっとも行き過ぎた形態が、大勢の胎児の命を救うためという大義名分の下、過激なグループによって行われる中絶を行う医師やその関係者へのテロ行為である。ボルタンスキー(Boltanski)は中絶をめぐる論争において、胎児の写真が果たした役割について次のように述べる。

1965年、スウェーデンの写真家レナート・ニルソンによって撮影されたある写真が、アメリカの雑誌『ライフ』の表紙を飾った。それは、子宮内部の羊膜腔に包まれた妊娠18週目の胎児の写真だった。…ここ30年に起きた中絶をめぐる紛争の中で、合法化という措置に反対した人びとは、胎児の写真を大いに活用することで、中絶が「まだ生まれていない子どもを殺すこと」であるという主張を支えようとした。彼らは、妊娠期間中の人間の生命を子宮の中で表象するものとしてニルソンの写真（もしくは同様の写真）を用いることで、胎児を称揚しようとしたり、あるいはまた、中絶後に生命を落とした胎児の写真を用いることで、多くの場合中絶に反対するデモの中でそれを振りかざすことで、自分たちの抗議を劇的に表現しようとした。(279)

可視化された胎児のイメージは技術革新によって初めて可能になったものであり、プロライフの胎児をめぐるレトリックを支える大きな武器になっている。¹¹ 実際、「立場を守る」でも中絶反対派のノーマンは胎児が描かれたプラカードを振りかざしている。

その反対に、プロチョイスでは胎児を人と見なさず、さらには「胎児の権利」よりも「女性の権利」を優先させる。このレトリックにおいて避けられない議論は、同じ胎児でも生まれた結果人になる胎児と、中絶によって人にならないまま葬られる胎児との間に区別はあるのかというものである。ボルタンスキーはプロチョイスの言説形成過程として「胎児のカテゴリーの構築」という操作が行われることを指摘する。「胎児の存在論的操作を構築主義的に行うこと」は、「殺害されるか、あるいは反対のことばによって認証されるかに応じて、肉の中に組み込まれたばかりの存在に全く異なるカテゴリーを割り当てることを目的としている」(232-233)。このカテゴリーには二つあり、ボルタンスキーはそれぞれを「真正な胎児」「できものとしての胎児」と名付ける。前者は親となる「プロジェクトに組み込まれる子どもに極端に高い価値が付与され、その結果、胎児にもほとんど同程度の価値が付与されるという特徴」(すなわち、すでに人としての価値が付与されている特徴)があり、一方、後者はプロジェクトに「組み込まれることのない胎児に、極端に低い価値が付与されるという特徴」(233)がある。「できものとしての胎児」は「世界の中でできるだけ痕跡を残してはならず、たとえ記憶の中であっても残してはならない。少なくとも、中絶をした女性本人以外の人びとの記憶に残してはならないのである」(236)。

その上で、ボルタンスキーはそれぞれのカテゴリーの胎児をめぐる言葉づかいの違いについてエコー検査における例にあげる。「真正な胎児」のエコー検査は、「科学技術を介してつくられた表象の中に、自分たちの子どもを識別＝承認するという行為である。肉の中に刻み込まれた存在は、『あなたの赤ちゃん』と指示される。形成途中の器官、とりわけ心臓と生殖器は、指で

示され、同定される」(241)。一方で、「できものとしての胎児」のエコー検査においては、医師は「肉の中の存在をあまりに具体化してしまい、この存在を生まれてくるべき子ども、すなわち『赤ちゃん』の方向へ引き寄せてしまうかもしれない用語を使わずに」に、「それ」、「娩出物」、「娩出される灰色の大きな塊」、「妊娠が始まる小さな点」、「妊娠のもととなるもの」、「胚」(241-242)といった言葉づかいをすることを具体的な体験談から指摘している。

では「立場を守る」における胎児のレトリックはどうなっているのだろうか。まずはプロライフのレトリックを多用するノーマンから見てみると、彼は胎児の描かれたプラカードを自作して振り回し、中絶クリニックのことを指すのにプロライフの間でよく使われる“the Butcher Shop (肉処理場)”(68)¹²というフレーズを多用する。しかしながら、彼のレトリックはプロライフのそれから逸脱することもある。次の引用はノーマンが中絶手術が行われているところを想像する場面である。

How they laid the girl down and gassed her and spread her legs and reached inside and found him and pried and pulled him out with the instruments. Stuck them into her, farther and farther in, grasped and pulled him out quivering and bloody. Stuck the knives up in between her legs and she writhed and moaned, showing her teeth, arching her back, gasping, panting.
(69 下線宮本)

中絶反対であるノーマンは胎児を“him”として人と見なした言葉を選択しているが、同時に最後の一文からは、女性に対する抑えがたいサディスティックな欲望が読み取れる。手術を受ける女性は麻酔をされているにもかかわらず、最後の方では、あたかも中絶が非合法だった頃に麻酔なしで危険な処置を施され、痛みに喘いでいる女性を微細に想像しているかのようである。

一方で、中絶手術を受けるシャリーもそれに付き添うデラウェアも胎児を人として呼ぶことはしない。呼び方については後で詳しく検討するが、ここではノーマンが掲げているプラカードに描かれた胎児（先に見たように胎児を人として可視化しようと試みるプロライフのレトリック）をめぐって、シャリーとデラウェアがどのように反応するかを確認しておきたい。シャリーを視点人物とした場面で語り手は、プラカードに描かれた胎児を“a picture of what looked like a possum (フクロネズミみたいな絵)”(67)と描写しており、シャリーはそれを人になりうる胎児だとそもそも認識できていないことがわかる。シャリーにその絵は何か尋ねられたデラウェアも、シャリーの視線に合わせて“road kill (ひかれた動物)”(67)と答える。結果、プロライフのレトリックは彼女たちにとっては意味をなさないものになっている。すなわち、中

絶論争において、「胎児が権利主体となりうる人なのかどうかという問題」をめぐって繰り広げられてきたプロライフとプロチョイスの言葉の応酬は、そもそも可視化された胎児を何か認識できないシャリーの言葉づかいによって脱構築されるのである。

5. 中絶をめぐる言葉の戦略——シャリーの場合

次にシャリーによる胎児をめぐるレトリックを辿り、彼女の中絶をめぐる言葉の戦略を見ていく。シャリーはお腹の中にいる胎児をめぐる独白で、胎児を“a ball of hot red light (熱い赤い光の玉)”や“what was inside her (自分のなかにあるもの)”、“a piece of her like a wart, like a scab you pick off (自分の一部だけれど、イボとか、剥がしてしまうかさぶたと一緒)”(72)と呼び、取り除くべき異物として扱う。そして自分の身体に起こっていることは自分で決める権利があるとしている。また同様に、デラウェアはロック先生との会話の中で、胎児を“some date rapist’s side effects (デートレイプの置き土産)”(77)と描写する。一方で、お腹にいた胎児だったデラウェアについては、シャリーは自分との一体感や妊娠が自身で下した決定であることを強調するのである。(“Delaware had happened because she was hers, her own, she made her happen” (72); “See, you were me until you were you, she told Delaware. I did you. I made you be” (73).)

このようにシャリーの胎児をめぐるレトリックは、先述の「できものとしての胎児」と「真正な胎児」のレトリックと重なる。これから中絶処置を施される胎児は「イボ」「かさぶた」といったもの、体の一部ながら取り除かれるべき異物になぞらえられる一方で、デラウェアについては胎児の時点からシャリーとの一体感の中で語られる。(最後の場面で、シャリーがデラウェアに“Hi, baby!”と呼びかけることも併せて考えてもいいだろう) また中絶論争の大きな論点である(プロライフが重視する)胎児の「生命の権利」が優先されるべきか、(プロチョイスが重視する)女性の「プライバシー権」や「選択権」が優先されるべきかという点をめぐっても、シャリーは後者の言説に則り自身の身体について自身が決定する権利があるとしている。

しかしながら、一方でシャリーの胎児をめぐる言葉づかいは、プロチョイスのレトリック——「真正な胎児」「できものとしての胎児」のレトリック——に収まるものではなくなくなっていく。シャリーの内面に入り込んだ独白は、同時に無意識に身体の決定権への葛藤を皮肉にも表明する。

She wasn’t some zoo monkey or some kind of wound, she was the person she was. That was what Linda always said when she was in the special class. Be the person you are, Sharee. You

are a whole person, a lovely person. (72)

ここでシャリーが自分のことを“monkey (サル)”でも“wound (傷)”でもなく、個性をもった“person (人)”だとする主張は、プロライフのレトリックに重なっていく。先ほど、はがすべき——すなわち中絶すべき——だとされた「かさぶた」の換喩である「傷」を自分じゃないとシャリーは言う。ここに中絶をめぐる大きな論点の一つである出生前診断の是非を補助線に引くとシャリーの葛藤が見えてくる。すなわち、出生前診断の技術が発達した現代では、胎児が障害を持っている可能性が高いと診断されれば、是非はともかくとして、そうでないときよりも中絶が選択される確率が上がるからだ。プロチョイスに属するレトリックを辿っていくと、シャリー自身こそ、シャリーの言葉づかいによれば、はがされてしまう「かさぶた」であり、女性の身体を侵犯する「傷」でありえたかもしれない。そのような実際に起こらなかった可能性がシャリーの中で今度は浮上してくる。

卵管結紮の提案をめぐるローク先生とデラウェアのやりとりにも触れておきたい。“‘She shouldn’t be having,’ then a pause./ ‘She was brain damaged during birth,’ Delaware said. She had said it fairly often. ‘It isn’t genetic.’ Living proof, she stared at the doctor” (76). デラウェアは女性の「選択権」を重視して卵管結紮の手術をするかどうかはシャリーが選択すべきと伝える一方で、シャリーの知的障害を先天的なものではなく、出産時の後天的な事故によるものだというエクスキューズを付け足して、知的障害を持ったシャリーが生殖の営みに組み込まれることを肯定しようとするのである。

これらのシャリーのお腹の胎児をめぐる独白は、別の観点から見れば、コーネル (Cornell) の言うところの“individuation (個性化)”——個性の生成——を確立するために不可欠な“bodily integrity (身体的インテグリティ)”——自身の身体は不可侵であり自分自身のものだと感じられ、自身の身体に対して自己決定権があると思える状態——を他者に侵されず、「身体的インテグリティ」を自由に想像する場所としての“imaginary domain (イマジナリーな領域)”を取り戻す試みだともいえる。コーネルは中絶権の否定を以下のように批判する。

The denial of the right to abortion enforces the kind of splitting that inevitably and continuously undermines a woman’s sense of self. Her womb and body are no longer hers to imagine. They have been turned over to the imagination of others, and those imaginings are then allowed to reign over her body as law. (“Two: Abortion”)

To deny a woman the right to abortion is to make her body not “hers” at the same time that

it reduces her to her “sex,” limitedly defined as maternal function. Such restrictive symbolizations deny a woman her imaginary domain. (“Two: Abortion”)

換言すれば、中絶をめぐるこれまでの法的議論の中では、女性が「身体的インテグリティ」を持つに値する個別の存在として見られておらず格下げされた存在であったことを、コーネルは糾弾しているのである。シャリーはお腹の胎児をめぐる独白の中で“*There was a scab over the wound, and she was going to get it off and be whole*” (72) と想像するが、まさに「身体的インテグリティ」を実現する試みといえる。また先にプロライフのレトリックと重ねた“*She wasn’t some zoo monkey or some kind of wound, she was the person she was*” (72) という独白も、リンダ先生の“*Be the person you are, Sharee. You are a whole person, a lovely person*” (72) という言葉に自己を投影し、その言葉を自分の言葉として反芻しながら「イマジナリーな領域」で自分の身体が何者であるのかを想像し、個性を持った個別の存在になろうと試みているといえる。但し、それは安定して達成されたものというよりは、そうシャリーが自身を鼓舞しているように聞こえる。とりわけ知的障害を持ったシャリーの「身体的インテグリティ」は、他者によって（例えば、ローク先生の卵管結紮の提案のように）侵犯を受け易い。だからこそ、シャリーの「身体的インテグリティ」への申し立ては、まさに自身の生存をかけたものとして切実に響くのだ。

ここでシャリーの、あるいはシャリーをめぐる物語もプロチョイスやプロライフの言説に収まるものでもなく、ゆらぎ、重なり合い、矛盾を含んだものになっている。¹³ 彼女たち（デラウェアの場合はシャリーの代理として）は、女性の生殖の「選択権」をめぐる言説に寄りかかりながら、ときに語気を荒め不安気にゆらぐ自身の物語を紡ぐ。その物語はシャリーが拠って立ち生きる場所を確保するために必死で繰り出す言葉たちなのである。

6. 中絶をめぐる言葉の戦略——メアリーとノーマンの場合

メアリーとノーマンの二人のふるまいや独白にも、生々しくもその感触を残す個人的断片が散見される。中絶反対のメアリーとノーマンの「立場を守る」という意気込みに比して、どこか二人には寄る辺なさが漂う。とりわけメアリーは明示的に、より堅牢なプロライフの物語を示してくれる活動のリーダーらしきヤングさん (Mr. Young) にパターナルな庇護と承認を求め、彼の描く大きな物語に身を委ねようとしている。

狂信的なノーマンは、自分の立場——プロライフの物語——を疑うことがないように見える。しかしながら、今では力が失われてしまった「男性がパターナルに振る舞う古き良きアメリカ」

という大きな物語にしがみついていることが次第に明らかになっていく。次の引用では、ピケの合間に向かったコーヒーショップの情景がノーマンの視点を通して描かれている。

Lists of stuff with foreign names stood on the counter. People in expensive clothes came in and ordered the foreign names. Norman said, "I want a cup of plain American coffee," as he always did...He felt tired. His hip hurt again, the grinding ache, and the coffee tasted weak and bitter. (69)

コーヒーショップにはおそらくカフェラテやエスプレッソなど外国語由来のメニューが並んでいること、そしてそれらを注文するのが高級な服を着た人々であることが吐き捨てられるように語られる。そしてノーマンは「古き良きアメリカ」が今でも通用するのだと言わんばかりにいつものように“a cup of plain American coffee (普通のアメリカンコーヒーをひとつ)”を頼む。しかしながら、「古き良きアメリカ」という安定した物語が弱体化したように、そのコーヒーは薄くて苦いのである。

また、次のノーマンの視点から語られる引用では、中絶反対の運動仲間であるはずの女性たちが、彼が取り返そうとする「古き良きアメリカ」の価値観を脅かす存在として、彼の攻撃の対象になっている。

What did her husband think he was doing letting her show herself on the street like that? They were all the same, showing their wares, prissing on their stick leg. Sucking up to Young. ... He knew what Young said and he knew his own business. None of their business. They ought to be home, keeping house and keeping out of the way. (77)

メアリーの言葉からもヤングさんがパターナルな存在であるのに対して、ノーマンは疎ましがられているのが明白である。ノーマンの攻撃性の裏にあるのは寄る辺なさである。弱体化した排他的な男性中心主義的な「古き良きアメリカ」の言説を、より安定的で強力な物語であるプロライフの物語に吸収させることで、自らの生存の場所を確保しようとしているのである。¹⁴

一方、メアリーの寄る辺なさは、十分な物語として語られることなく、断片として小説の中に埋め込まれている。次の引用では書き出しの“trembling”を媒介にして、別の断片が語られる。

But the trembling made her feel that she was like Grandpa Kevory sitting in the dark room

that smelled of urine, his big, white hands trembling and shaking, you'll have to help me hold that cup, Mary, and then his head would jerk, on purpose, and the water would run down his chin and he would shake Mary with his horrible shaking hands. No one would come. (75)

祖父との体験がどのようなものであったのか手がかりがあまりに少なく、何が起こったのかは読者にはわからない。ただ助けに誰も来なかったことがトラウマとなり彼女の“trembling”の原因になっていることだけわかる。その絶望の中に一人取り残されている感触が、ヤングさんからの承認を欲する気持ちと表裏一体であることは、ヤングさんが自分の奉仕を見ていてくれることを夢想しながらも“*No one was coming. No one would come*” (75) と呟くことからわかる。ここでは、ヤングさんが見てくれることを期待したからこそ、一層「誰も来ない」という絶望が増幅されるのである。続いてメアリーは再びヤングさんの描く物語の一部になることを夢想し、“*a soldier of Life* (「^{ライフ}命」の兵士)” (75-76) のイメージを自らに重ねながら無力ではない自分を想像するのである。

大きな物語が解体されたと言われて久しい 1990 年代に書かれた「立場を守る」には、かつて大きな物語の側においてその物語を取り戻そうとする男や、パターナルな存在に神託のような言葉を求める女の断片化された小さな物語の痕跡が見て取れる。一見、中絶をめぐる行われているように見える二人の立場を守る戦いは、シャリーの戦いとも重なり合いながら、自分の存在を託すのに耐えうる物語を求める戦いであったのだ。

7. デラウェアの背負う「母娘の物語」と物語から解放される束の間のとき

プロチョイス、プロライフという言葉を経営的に避けることによって、それぞれゆらぎを含んだ個々の物語の痕跡はしっかりとテキストに刻み込まれる。そして、アメリカの分断を象徴するような中絶クリニックをめぐる風景は、それぞれが寄る辺なさや怒り、孤独、絶望を増幅させながら、自分の生存する余地を求めて必死に戦っている様相へと変わっていく。しかしながら、誰もが自分が拠って立つ物語を求めている小説内の言説空間は、物語が充満した空間であることには変わりがない。そこで、この小説の真のヒロインともいえるデラウェアに注目したい。メインの登場人物の中で唯一彼女は自分の拠って立つ物語を求めておらず、むしろ、物語を背負う重さに窒息しそうになっている。デラウェアは子供ながらシャリーの母親の役割を担うことになり、その重みを時に持て余しながら、常に泣きたいけれど泣けないでいる。

中絶クリニックの受付でのやりとりや、看護師の女性とのやりとりにおいて「30代の母親に付き添われた、望まぬ妊娠をした10代の娘」という物語を、デラウェアが説明し是正しなければ

ばいけないことが反復される (73)。デラウェアが説明すると沈黙が漂い、困惑した視線が彼女に降り注ぐ。母親の母親代わりをするのが日常であるデラウェアがその「母娘の物語」と説明責任を常に背負って来たことを考えると、これまでの人生の中でそのような沈黙や視線を嫌と言うほど受け取ってきたことが容易に想像できるのである。だから、デラウェアには立場を守るための物語が必要というよりは、引き受けなければならない物語があるといった方が正しい。母親然として振る舞う娘の態度にシャリーは“bossy” (73) だとこぼすが、当然のことながら、デートレイブによる妊娠の中絶の相談を 10 代の娘が母親から受けることはかなりきついことである。また先述のローク先生からの卵管結紮について、シャリーの身体に関わる決定を代わり迫られるのもかなりタフなことである。

デラウェアは決して同情を求めているわけではないが、そのことと彼女の背負っている物語の重みとはあまり関係がない。彼女が自分の背負ったその重みを何ら別の「物語」に託したりしないだけに、その重みは折に触れ「涙」として表現されようとする。先ほどの看護師とのやりとりの後、シャリーとは無関係な理由で——ノーマンのプラカードが彼女の肩に接触した時の痛みに結び付けて——デラウェアは泣こうと試みる。“She wanted to cry because it hurt. She wasn't hurt. There was no mark on her jeans jacket. There would be nothing but a little bruise on her, something she'd see tonight when she undressed, or maybe nothing” (74)。ここでは泣きたい気持ちと肩の「傷」に因果関係がないことが明示される。さらにこの後で“*But the place where the wooden edge of the sign had hit felt separately alive and hurtful. It made her heart cold and her throat swollen*” (74) とあり、デラウェアは確かに存在するはずの目に見えない、あるいは語られない、痛みや重みを可視化する「傷」を必要としているのである。

そして、ローク先生とのやりとりの後でも、シャリーがいない間にデラウェアはさっさと泣いてしまおうとする。しかし、やはり泣けないのである。そのためにシャツのボタンを外してプラカードが当たったはずの肩の場所を確かめる。“*Nothing showed except some redness that was probably because she'd kept rubbing it with the hand Sharee wasn't holding*” (78)。涙を流すために必要な「傷」はそこにはない。わずかに見える「赤み」もシャリーから自由な手——彼女がこれから自分の人生を選び取る手——でつけられたものである。その手は無意識に彼女の引き受ける説明責任の重さと息苦しさを「傷」として可視化しようしているのだ。

そして、あらゆる物語が等価に並べられた物語の充満した風景の中で、もっとも胸を打つ瞬間は、小説の終わり近く、デラウェアがさっと涙を流すときに訪れる。

“*Delaware is a pretty name,*” Kathryn said behind the reception desk, and after a while the words came across to Delaware. … “*Just you and her live together?*”/ Delaware didn't mind,

because Kathryn's voice was easy, or because her sugar-brown face looked tired now that it didn't look angry. "Yeah," she said./ "You in high school?"/ "Yeah."/ "Job?"/ "Summers. She works at the Frost-T-Man. She always works."/ "That's good," Kathryn said softly. She sorted some more and after a while said, "You doing OK in high school," not a question but as if she knew./ "Yeah."/ "I bet you do. Go on to college?"/ "Yeah I guess."/ "That's good," Kathryn said again. "You'll do it."/ The tears arrived suddenly and quietly and poured out and dried up. (78-79)

会話の前半部分は、幾分かリラックスした雰囲気ではあるが、いつもの「母娘の物語」というナラティブに沿って進められる。その後で、受付の女性はいたって普通のこと——高校のこと、進路のこと——を尋ねる。大人が初対面の高校生にする典型的なスモールトークでしかないこの会話は、その「浅さ」によって、没个性的・匿名的な時空を作り出し、ほんの束の間だけ、デラウェアの背負っている物語を下す余白を生み出す。背負っていた物語が下されたとき彼女は衝動的に涙を流す。物語の充満した言説空間の隘路を縫って奇跡的に探り当てられたその空間の出現がほんの束の間であるのと同様に、彼女の涙は激しくもすぐに乾いてしまう。余白として啓示された新しい自由な言説空間の可能性は、ほとんど気づかれない間にすっと消えていってしまうのだ。

9. むすびに

中絶問題だけでなく、あらゆる論点が保守とリベラルの名の下に分断されるアメリカで、個々のゆらぎを含む物語はいずれかの陣営の物語に収斂されていく。断絶が深まれば深まるほど、ゆらぎは捨象され、両陣営の物語はトレードオフの関係——どちらか一方の物語を肯定すれば、他方を全否定すること——になる。個々の物語を語る声を奪われた人々は、いずれかの物語に自分たちの声を重ねてそれに殉じるか、声を重ねながらもゆらぎや葛藤を自分で持て余し孤独の中に取り残されるしかないのである。そして無視された声たちは絶望の中で怒りを増幅させていくのである。

先述のコーネルは、中絶という決断がステレオタイプ化された解釈をされ、その結果、女性たちが言葉を喪失してしまう状況を以下のように語る。

The women's loss of words cannot be dissociated from the much larger problem of the dearth of words, symbols, of a framework for thinking of women as subjects, through which they

can imagine, and then articulate, their experience. Some women clearly suffer over their abortions and are forced to suffer in a silence so profound that it erases the experience from conscious life, leaving its traces in other forms of unconscious expression. (“Two: Abortion”)

個々の経験を語る声が抑圧された結果、主体としての自己を想起するための言葉や象徴、枠組みが欠如するという状況は、中絶手術を受けた女性だけでなく、中絶をめぐる問題に関わる人々——シャリー、デラウェア、メアリー、ノーマン——や、さらにはより広い文脈にいる人々に敷衍することができるだろう。「立場を守る」は、プロチョイス、プロライフの言説を揺るがしながら、沈黙の中にあるか、あるいは中絶をめぐる大きな物語に回収されるほかなかったかき消された声を、無意識に残されたわずかな痕跡の中に聞き取ってきた。そこでは、増幅された怒りや絶望、恥辱の中で自分が拠って立つ物語の立場を確保しようとするそれぞれの戦いが同じ地平で語られている。

一方で、そのような物語がぶつかり合う言説空間の息苦しさを小説の中で引き受けているのがデラウェアである。ル＝グウィンには、それぞれの物語を並置するだけに留まらず、物語から解き放たれた自由な時空を夢想する。デラウェアが「涙」を流し、背負わされた物語から解放されるのは一瞬のことである。しかし、分断され閉塞した言説空間に訪れた奇跡的な一瞬だからこそ、そこに啓示される新しい自由な言説空間の可能性は強度を持ち続けるのである。

付記

本稿は2019年10月26日に東北学院大学に於いて開催された「英語英文学研究所学術講演会」で発表した「小説の言葉—プロチョイスとプロライフの間から垣間見るアメリカ的風景」を大幅に加筆修正したものである。

注

¹ 西山は、アメリカ合衆国の成り立ちや政治制度、法制度、選挙制度、宗教、多民族国家、移民、アイデンティティ・ポリティクス、中絶、銃規制、報道メディアなど多岐にわたる論点から、アメリカが元々分断に向かう傾向にあることを指摘しつつ、そのような背景の下にトランプ大統領がその分断の度合いをより深化させていることを説明している。

² ロウ対ウェイド判決は「妊娠を継続するか否かに関する決定を女性のプライバシー権に含まれると判示し、人工妊娠中絶を規制する法律の大部分を違憲無効」とし、「妊娠期間を三つに分け、第1期は政府は中絶を禁止してはならず、第2期は政府は中絶を禁止してはならないが母体の健康のために合理的な範囲内で中絶方法を制限することができ、第3期には中絶を禁止することができる」と判断した¹判決である。
(西山「第2章1」)

³ 「プロライフ」「プロチョイス」という言葉づかいについて、荻野は「当事者たちは一般的に『プロライ

フ』『プロチョイス』と自称する場合が多い…が、これらの呼称はそれ自身が特定の政治的メッセージを帯びたものであるため、ここではより単純に『中絶反対派』(あるいは『反中絶派』) および『中絶擁護派』と呼ぶことにする」としている。(vii) 実際は、荻野が指摘するようにプロチョイス派とされる人々もプロライフ派とされる人々も、「特定の政治的メッセージ」(本稿の言葉でいえば「物語」)の下に束ねられるものではないのではあるが、本稿では、「プロライフ」と「プロチョイス」の物語が、小さな物語をそれぞれの物語に収斂していく力学に着目しつつ、それに抗うナラティブとしてアーシュラール・グウィンArshular Gwynの短編「立場を守る」を分析していくため、本稿では「プロチョイス」「プロライフ」という語も使用する。

⁴ NAF (National Abortion Federation) の統計によれば、1977年から2019年までに中絶を行う施設の関係者に向けられた暴力は、殺人11件、殺人未遂26件、爆破42件、放火189件である。 (“2019 Violence and Disruption Statistics”)

⁵ 中山は、アメリカの保守の歴史を辿りながら、その多種多様な様相を示す一方で、「保守」の名の下にそれらが一緒くたにならざるをえない力学を説明する。

⁶ トランプ政権下のもう一つの文学的動向として、ディストピア小説であるジョージ・オーウェル (George Orwell, 1903-1950) の *1984* (1949, 『1984』) やマーガレット・アトウッド (Margaret Atwood, 1939-) の *The Handmaid's Tale* (1985, 『侍女の物語』) がリバイバルしていることを挙げておく。とりわけ後者はキリスト教原理主義的なギレアド共和国に支配された近未来のアメリカを舞台に、著しい出産率の低下を背景に、妊娠できると見なされた健康的な女性の生殖活動が国によって厳密に管理されるディストピアな世界を描いている。このリバイバルは女性の身体決定権が奪われることがトランプ政権下でいよいよ現実味を増してきたという人々の恐れをダイレクトに反映したものと言えるだろう。(Mulkerrins および AlTaher も参照) 『侍女の物語』のテレビドラマは、トランプ政権樹立直前の2016年に製作が決まり、2017年の4月より2020年10月の時点で第3シーズンまで放映されている。 (“The Handmaid's Tale (TV series)” および “A hulu Original”)

⁷ *A Book of American Martyrs* と *A Spark of Light* の日本語タイトルは宮本訳。その他のタイトルについては既訳のタイトルを記した。

⁸ オーツはインタビューの中でアメリカの深刻な断絶を憂いている。そして、執筆当初は「殉教した中絶クリニックの医師」(the martyred abortion provider) に関心を持っていたが、100ページ書いたところで、加害者の Luther Dunphy (ルーサー・ダンフィー) とその家族について語ることが不可欠だと気づいたと語っている。その上で、次のように語る。“I'd always had the end in mind—the very last line shimmered before me like a mirage. For it seems to me that the tragic issues of one generation may be dealt with and resolved in the younger generation; indeed, this is inevitable.” (Susi)

⁹ “Princess” および “What It Was Like” を参照。

¹⁰ 「この二語」とはプロライフとプロチョイスを指す。

¹¹ 2006年のドキュメンタリー映画『ジーザス・キャンプ』は、ジョージ・W・ブッシュ政権下、キリスト教福音派による子ども向けサマーキャンプを追ったものである。そこでも、中絶が悪であることを子どもたちに教え込む場面において、胎児の模型のおもちゃが重要な役割を果たす。

¹² 「立場を守る」の引用に付された日本語訳は畔柳訳を参照した。

¹³ 中絶をめぐる立場のゆらぎについて、オーツはツイッターで “When I researched abortion in America for a novel, I learned that as many ‘anti-abortion’ women have abortions as pro-choice” (@JoyceCarolOates) と投稿し、内密に Planned Parenthood (避妊や性病、中絶など女性の生殖に関わるサービスを安価で提供する NPO で全米にクリニックを持つ組織) に頼らざるをえないキリスト教福音派 (evangelicals) の女性たちの状況をレポートした記事 (Kasinof) にメンションしている。記事では、Planned Parenthood への通院後も福音派のコミュニティで暮らし続ける女性たちが、自身の身体の決定権が誰にあるのか混乱しゆらぎを抱えながらも、福音派の言説の下にそれらを抑圧しなければいけない状況が報告されている。

¹⁴ ノーマンの人種に関する描写はないが、ノーマンの怒りは西山が指摘する「トランプを支持した『声を奪われた白人』」のそれに重なる。第二次世界大戦後のアメリカの繁栄を支えてきたと自負する製造業に従事する白人労働者の社会的経済的地位は「近年の産業構造の変化とオートメーション化の進展により」低

下し、「かつて彼らは労働組合を基盤として民主党陣営に組み込まれていたが、労働組合の弱体化もあり、政治的にも代表されなくなっている」。排外主義的でポリティカル・コレクトネスという規範を無視し続けるトランプ大統領は「この現状に不満を持つ白人労働者層を支持基盤として取り込んだのであり、白人労働者層も『アメリカを再び偉大にする』との懐古的なスローガンを掲げるトランプを支持したのだった」。(「第3章1」) 白人労働者の社会的経済的地位の低下は、「立場を守る」が出版された1990年初頭でも既に起こっていた。

引用・参考文献

“A hulu Original: The Handmaid’s Tale.” *hulu Press*, <https://press.hulu.com/shows/the-handmaids-tale/bios/amanda-brugel/>. Accessed 27 Oct. 2020.

AlTaher, Bassmah B. “The Revival of *The Handmaid’s Tale*: Empowering Women’s Rights in the Twenty-First Century.” *Journal of International Women’s Studies*, vol. 21 no. 1, pp. 343-352, <https://vc.bridgew.edu/jiws/vol21/iss1/25>. Accessed 27 Oct. 2020.

@JoyceCarolOates. “When I researched abortion in America for a novel, I learned that as many ‘anti-abortion’ women have abortions as pro-choice.” *Twitter*, 1 June 2017, 11:54 p.m., <https://twitter.com/joycecaroloates/status/870292581682475010>. Accessed 27 Oct. 2020.

Atwood, Margaret. *The Handmaid’s Tale*. Kindle ed. Houghton Mifflin Harcourt, 1986.

Cornell, Drucilla. *The Imaginary Doman: Abortion, Pornography & Sexual Harassment*. Kindle ed. Routledge, 1995.

“Handmaid’s Tale (TV series), the” *Wikipedia*, 24 Oct. 2020, [https://en.wikipedia.org/wiki/The_Handmaid%27s_Tale_\(TV_series\)](https://en.wikipedia.org/wiki/The_Handmaid%27s_Tale_(TV_series)). Accessed 27 Oct. 2020.

“In Depth: Jodi Picoult.” *C-Span*, 4 Nov. 2018, <https://www.c-span.org/video/?452813-1/depth-jodi-picoult>. Accessed 28 Oct. 2020.

Kasino, Laura. “The Secret Evangelicals at Planned Parenthood.” *Marie Claire*, 31 May 2017, <https://www.marieclaire.com/politics/a27333/secret-evangelical-christians-at-planned-parenthood/>. Accessed 27 Oct. 2020.

Kissling, Frances and Denise Shannon. “Abortion Rights in the United States: Discourse and Dissension.” *Abortion Law and Politics Today*, edited by Ellie Lee. Macmillan, 1998. pp. 144-156.

Le Guin, Ursula K. “The Princess.” *Dancing at the Edge of the World: Thoughts on Words, Women, Places*. Kindle ed. Grove Press, 1989.

-. “Standing Ground.” *Unlocking the Air and Other Stories*. HarperPerennial, 1996. pp. 67-79.

-. “What It Was Like: A Talk Given at a Meeting of Oregon NARAL in January 2004.” *Words*

- Are My Matter: Writings on Life and Books*. Kindle ed. Mariner Books, 2019.
- Mulkerrins, Jane. “Elisabeth Moss on *The Handmaid’s Tale*: This is happening in Real Life. Wake up, People.” *The Guardian*, 5 May 2018, <https://www.theguardian.com/tv-and-radio/2018/may/05/elisabeth-moss-handmaids-tale-this-is-happening-in-real-life-wake-up-people>. Accessed 27 Oct. 2020.
- Oates, Joyce Carol. *A Book of American Martyrs: A Novel*. Kindle ed. HarperCollins, 2017.
- Picoult, Jodi. *A Spark of Light: A Novel*. Kindle ed. Ballantine Books, 2018.
- “stand one’s ground.” *Oxford English Dictionary*. Second Ed. CD-ROM. vers. 4.0. Oxford UP, 2009.
- Susi, Danielle. “An Eerie Prescience: Talking with Joyce Carol Oates.” *The Rumpus*, 18 Sep. 2017, <https://therumpus.net/2017/09/the-rumpus-interview-with-joyce-carol-oates/>. Accessed 27 Oct. 2020.
- “2019 Violence and Disruption Statistics.” *NAF*, <https://prochoice.org/wp-content/uploads/NAF-2019-Violence-and-Disruption-Stats-Final.pdf>. Accessed 27 Oct. 2020.
- 『RBG——最強の 85 才』ジュリー・コーエン、ベッツィ・ウェスト監督、フラインフィルムズ、2019 年。DVD。（*RBG*. Directed by Julie Cohen and Betsy West, Magnolia Pictures, 2018. Film.）
- 荻野美穂『中絶論争とアメリカ社会——身体をめぐる戦争』岩波書店、2012 年。
- 畔柳和代「解説（『立場を守る』）」平石貴樹編『しみじみ読むアメリカ文学——現代文学短編作品集』松柏社、2007 年。52-54 頁。
- 『ジーザス・キャンプ——アメリカを動かすキリスト教原理主義』ハイディ・ユーイング、レイチェル・グレイディ監督、アニプレックス、2012 年。DVD。（*Jesus Camp*. Directed by Heidi Ewing and Rachel Grady. Magnolia Pictures, 2006. Film.）
- 「トランプ大統領 連邦最高裁判事に保守派バレット氏を指名」『NHK』2020 年 9 月 27 日、<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20200927/k10012636731000.html>. 2020 年 10 月 27 日取得。
- 中山俊宏『アメリカン・イデオロギー——保守主義運動と政治的分断』勁草書房、2013 年。
- 西山隆行『格差と分断のアメリカ』Kindle 版、東京堂出版、2020 年。
- ボルタンスキー、リュック『胎児の条件——生むことと中絶の社会学』小田切祐詞訳、法政大学出版社、2018 年。
- ル＝グウィン、アーシュラ・K「立場を守る」畔柳和代訳、平石貴樹編『しみじみ読むアメリカ文学——現代文学短編作品集』松柏社、2007 年。31-51 頁。